

日本語ディベート選手権国際大会 2019 台湾（報告書）

◆実施概要

事業名：

日本語ディベート選手権国際大会 2019 台湾

主催：

國立交通大學

共催：

ディベート教育国際研究会/日本語ディベート選手権国際大会実行委員会

協力団体：

九州大学言語文化研究院ディベート教育研究室/NPO 法人 全国教室ディベート連盟/
NPO 法人 全日本ディベート連盟/日本ディベート協会/台湾交通大學校友總會/
韓国大学生日本語ディベート大会運営委員会

後援：

中華民國外交部/公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所

協賛企業：

21 社

クラウドファンディング協力者（及び団体）：

21 名

実施期間：

2019 年 2 月 27 日～3 月 3 日

実施事業：

レクチャー、試合準備、大会、交流アクティビティ、バスツアー、
指導者向け審判研修会、学術交流会

プログラムコーディネーター：

久保健治（全日本ディベート連盟専務理事、九州大学大学院学術研究員）

招聘講師及び審判：

師岡淳也（日本ディベート協会会長、立教大学准教授）

蓮見二郎（ディベート教育国際研究会、九州大学准教授）

諏訪昭宏（韓国大学生日本語ディベート大会運営委員会会長、釜山外国語大学准教授）

参加人数：

約 70 名（日本、台湾、中国、韓国、マレーシア、ドイツ）

◆本大会の特徴と成果

1. 共通語としての日本語を運用した多国籍チームのプロジェクト遂行

日本語学習者は学習した日本語を使い、日本語のネイティブスピーカーは日本語を如何に日本語学習者にわかりやすく情報を伝達するかを課題にした。

チームはプログラムの初日に抽選によって、6人から7人の国籍混合の多国籍チームを8つ作った。これにより準備段階からチームと意思疎通するために、共通語としての日本語のみを使用する環境を整備した。日本語話者は、日本語を話す外国人からどうすれば考えている事を日本語で表現できるのかについて引き出すスキルが問われると同時に日本語話者同士なら可能な曖昧なやり取りができず、本質的な内容について端的に言語化する能力が必要となった。これにより、日本語を共通語とした多国籍チームにおいて論理を根拠としたプロジェクト遂行能力が養われた。

2. 実社会から要請されている「使える外国語」の育成

ディベートは表現方法もさることながら、より論理的な内容を重視する教育方法である。そのため、正確な文法でどんなに綺麗な表現を使えたとしても、根拠が弱い内容ならば評価は低くなる。また、多様な価値観が存在する事を前提にしているため、共通の判断軸として論理を活用しており、これはグローバル企業がロジカルシンキングを重視するのと同様の環境を提供できている。伝え方もさることながら、中身に着目する事で実務的な外国語運用能力が養われた。

3. 表面的ではない異文化コミュニティビルディングの可能性

ディベートという討論形式を通じて、「議論する文化」を共有していく事で、この場に参加したメンバーはロールプレイを通じて、価値観の違いを認めつつも議論をする作法を身に着ける事ができた。また、ディベートの準備という、インテンシブな活動を通じて皆で1つの大きな課題をクリアしていくという経験が互いの関係をより密にしたものと思われる。大会終了後も継続的な交流を自主的に提案したり、来年度の大会での再会を約束しあう様子も見られた。これは表面的な異文化交流ではなく、価値観の違いにまで強く踏み込んだ交流が実現でき、この大会を通じて構築された交流は大会の継続を通じて1つのコミュニティに育成されていく可能性を示唆している。実際に英語ディベートの世界では既にそれが成功している事から、本大会を継続していく事で、将来日本語を運用するグローバルリーダーがこの大会から数多く輩出できる可能性を秘めている事が確認できた。

◆参加者からのフィードバック（アンケートより）

大会の性質から、日本語学習歴が長く、上級者で、日常生活に支障がない日本語能力（N2以上）を持っている学生がエントリーしてきた。しかし、ディベートの経験は浅く、ほとんどが初心者であった。

参加者の満足度は高く、ディベートに対してはこれまで、イメージから苦手意識を持つ者が多かったが、概ね肯定的な感想が得られた。ディベートに関しては実質3日間のスケジュールで行われたが、自分の成長を実感できたという声から密度の濃い時間だったということが分かる。ターゲット言語である日本語スキルの向上だけでなく、コミュニケーション能力、チームビルディング、ロジックを組み立てることなど多岐にわたり、学習した事が多かったという反応を得られた。

日本語ネイティブスピーカーは中高生から日本語ディベートに取り組んでおり、10名中8名がディベート甲子園のOBであった。

日本語能力、ディベート能力が十分に備わっている日本人大学生は日本語を外国語として話す大学生との協働から、自省する機会になったようだ。これまで自身が経験したことのない、母語が異なるメンバー構成の中で、自分が持っている知識、考えをどうやって伝えるか、チームリーダーとして求められていることなど、考えることが多かった、という感想が複数あった。

日本語ディベートの国際大会、またこのような形式でしか得られないことを実感したようである。国際交流、チームビルディング、異なる価値観を持った者同士のコミュニケーション能力の実践の場になったことに多くの参加者がその意義を強く感じていたようである。また、特筆したいのは、日本語ディベートというコミュニティで構築したネットワークが将来に繋がることを期待していると記した参加者もいた。

審判研修はこれまでの大会のOB、日本語教師が出席して行われた。ほとんどの日本語教師はディベート経験がなく、大会指導はハードルが高く、日本語ディベート普及の大きな壁となっている。しかしながら、受講した教師たちは、時代の趨勢とともに、ディベートを取り入れた教室活動の有用性を感じている。海外において、ディベートの専門家から直接指導を受けることがこれまでなかったので、受講者からは継続的にディベートスキルを学びたいという声や、ディベートを取り入れた教室活動のシェアリングを求める声があった。

◆今後の課題

1. 持続可能な運営

今回の運営は多くの無償ボランティアに支えられており、現状では持続可能な状況とはいえないのが実情である。開催にあたり、多くの皆様から多大なるご支援を賜ったが、大

会継続に際して、引き続き協賛企業、クラウドファンディング協力者の支援が不可欠である。

2. ノンネイティブジャッジの育成

今回はネイティブによるジャッジを中心となったが、今後国際大会継続のためには、世界各国のノンネイティブジャッジの確保が課題である。ディベート審査員育成は非常に難しい事業であり、世界各国のディベートコミュニティでも苦戦しているのが実情である。既存のディベート団体とも適宜協力しながら、長期計画で、ノンネイティブジャッジの育成を視野に入れて活動を行う必要がある。

3. 日本語教育のための日本語ディベートの普及活動

日本語教育に特化した日本語ディベート教材などは不足しているというのが現場での声である。今後、この大会とその周辺活動を通じながら教育プログラムの開発や指導者の育成なども同時並行で実施していく事を目指し、日本語ディベートのインフラ整備をしていかなければならないと考える。

【参考】

パブリシティ結果

本大会は、以下の台湾、日本、韓国のメディアで報道された。

〔台湾メディア〕

聯合報 (<https://udn.com/news/story/7324/3675112>)

Line Today 新聞 (https://today.line.me/TW/article/ZWYkpO?utm_source=lineshare)

大成報 (http://www.greatnews.com.tw/home/news_pagein.php?iType=1010&n_id=178648)

台灣新浪網 (<https://news.sina.com.tw/article/20190303/30299042.html>)

蕃薯藤新聞 (<http://n.yam.com/Article/20190303507573>)

勁報 (http://www.twpowernews.com/home/news_pagein.php?iType=1010&n_id=155690)

PChome 新聞

(<http://news.pchome.com.tw/society/twpowernews/20190303/index-15515961402626847002.html>)

Hinet 新聞網 (<https://times.hinet.net/news/22254442>)

〔日本メディア〕

J-CAST(<https://www.j-cast.com/2019/03/03351733.html?p=all>)

九州大学 HP(<http://www.kyushu-u.ac.jp/en/topics/view/330>)

〔韓国メディア〕

国際新聞

(<http://www.kookje.co.kr/news2011/asp/newsbody.asp?code=0300&key=20190308.99099003039>)

CNB ジャーナル(<http://www.cnbnews.com/news/article.html?no=402554>)

リーダーズ経済(<http://leaders.asiae.co.kr/news/articleView.html?idxno=88643>)

(文責：上條純恵、久保健治)